

ガラスのやうな薄い雪が通る。

深い深い夜。

また汝は同じ手付をして髪油を塗る。

死人の皮膚を嗅ぐやうな髪油を……

風が静まるやうだ。

暖爐をあたためよ……

汝の瞳の中で

性慾が苦痛を表はしてゐる。

## 鐘

鐘は重たし

鐘は重たし

ものみなを忘れよと、

されどまた温かく

來しかたも、おぼろおぼろに消えて行く。

あれはあれ、あの鐘は京都相國寺。



揺るる小舟

残れるたそがれの光やはらかに  
暗みゆく並木の影のうつとりと、  
おぼろに高き時計臺も、一隅に暮れ匂へば  
橋の下なる我が河は  
はやそことなき歡喜の聲を立てたり。

われらが涼しき戀。

音なき小舟のすべりゆく水の上

静かなる櫂の歌、心の空に舞ひのぼり  
二人の言葉こころよき空しさに  
そは廢れつつ繋がれて遠くに迷ふ……

あゝされば、われは縁にかがやく夜

惱ましき君が匂を知れるのみ。

かくもただ、短き呼吸の君が匂を知れるのみ。

いと明かき夏の夜の小舟の上。



## 夏

夏きたらむとする低き野に

樹は觸れあひて息あたたかく

いづこにか鳥啼けども夢のごとさだかならず。

烟れる不透明の太陽は、

今や疲れたる黄金と緑との午後を示し

心内にすすみくる平穩の光を投ぐ。

森の入口に朝まだきより

はたらきの家族の者、うち捨てゆきし

荷車は靜かに黒き影を横たへ

そのあたり乾ける路傍の草熱く匂へば

時はすべての上に聲をひそめ

かがやく靜寂に少時休らひたり。

午後。

我が見るかかる東の間の心に

さらに今、近きところを來るものあり。

つひにつひに、そは、我れに微笑むごとく

正しくもあらはれくる堤の上

WORKER の濃き陰影の帽子。



過ぎし日の窓邊

青き葉は伸び茂りて、  
過ぎし日の窓邊を窺く。

重き窓掛まどかけに日光はかがやき、  
よび立つる鶯鳥のこゑ、家の裏手より、  
木の間の前方より聞こえる。

そはいつの日なりしか。君と我と

鏡の前に紅き薔薇を凝視みつめてあり  
すべての好きものよりなほすぐれて好き愛を、  
われらそを、心に夢み居たり。

いま、好き愛は逃れ去る。  
紅き薔薇のほとりより。  
鶯鳥のさけび、  
ただ聞くは水のひびき……  
すべてみな重き晩夏おそなつのところに。



## 戀の椅子

夜の女の静かなるは  
ピンをもてとどめたりし  
やさしく朧の晝にも似たり。

汝の膚は、木炭晝の、消えゆくあとの愁を帯び、  
ただふさはしく黄金の縁を描くに似たる音楽あり。  
あゝ戀の夜の二つの椅子。  
卓上に注ぐ水よりも、  
なほ美しき汝の味、淡き淡き味。

## 眠りをさます夜半

眠りをさます夜半、  
ゆるゆる唄ふ樂しさあり、  
とけゆく心の柔らかなる  
ゆるゆる唄ふ樂しさあり。

あゝ睡眠の鍾は深く、投げあぐるにちからもなし。  
おぼろなる君が腕の美しさよ。



黄金と白との不思議なる君が夢は、  
わが胸の上に、  
胸の上に歌曲を織る。

## 小曲

青春の小徑惱ましく、  
足取りはうらがなしく、  
されどまたおもしろし

憂愁こそはやがて其の限りも知らぬ足拍子。  
足拍子とるそのひまより、  
「人生」は過ぎ行かむ、  
或るときは、ほの暗く優しき影によりそひて、



さればまた白日まじるといへども猶。  
靡ろにうかぶ想をば辿らせよ。

幸みちしちくつきの

そは我がちくつきの、

青き小鳥のそが上につぶやく時。

あゝ彼の太陽は、

此日も出でて静やかに燃えそむべし……

胸

雨ふる庭の哀しさ、

消えゆく胸の哀しさ、

ただ憂ひのみ……のこる哀しさ。



ふたりの夜

夜は重ねゆく浪のうねりの如く  
音なく光なく、滑らかに夢む。

静かに遠く更けゆくほど  
われらが戀はかがやきいづ。  
ふたりの言葉、かつ絶え、かつ續き、  
ややありて溜息のみ、にほやかに胸にのこれば、

あゝ夜は間近にたのしき臥床をつくり  
味よき戀の盃をも、  
歌の濤間に泛ばせくる……。



## 慾望

われは欲りす  
好もしき女を  
ゆるく疲れて快き女を。

われは欲りす  
痺れし歌を。  
美しくして痺れし歌を。

われは欲りす

舌によき彼のもろもろの肉と野菜  
白きクロスと舞蹈する官能の美味を。

われは欲りす  
酒と煙草と、

瞬時にして溺るる酒と煙草と。

われは欲りす

香水のふりそそがれし眠の床  
ものうく魅する夢の刹那を。

……われに堪へがたき欲望あり。



われは、かく生き  
われはかく願へるのみ！  
そはわが全身の呼吸にして  
美なる一瞬の命なるを。

## 心の奥

### I

夢は青く、静かにして  
月の光の中にただよふ。

見たまひしや、わが心の奥を、  
古き昔の繪織物  
おぼろに消ゆる美しさを。



憂愁の庭に、

花はみな咲きて散り布き

小鳥は、空に飛ばむとして夢む。

あゝ

見たまひしや、君はまた

ロメオの若き語らひを、

朧なる織物の、かき消ゆる心の奥を。

悲哀ひがひに隠るる

白き額、

嘆息に燃ゆる胸、

さし伸べたる戀の手は、甘くしてやはらかなり。

音なき園そのにかがやく夜………

かがやく夜。

人と花と、見たまひしや

あゝ、かく、美しく静かなるを。

II

月は舞踏に疲れ、

花やかにして懶き床に眠る。

今宵、地上には戀の柩ひつぎをつくり

あまたの花を飾り、

ひそひそと従ひゆく人の群あり。



月の前を過ぎり  
憂愁の園を出て  
音なく従ひゆく人の群あり……

III

おぼろに曇る夜はなつかし  
戀の室むろはたのし、  
君がねむりは花の如く  
白き腕かみは浮きて見ゆ。

かの窓より、  
光は忍び入り、

美しき淫行の夢は斷續して  
ふたりの身を疲らす。

あゝわれらが柩はここにありしよ、  
われらが戀を守るべく、ふたりの床に――

IV

春。

紅き小鳥はかくれ去り  
わが憂愁の庭に  
朝も、夜も、空しき風は温む

紅き小鳥はかくれ去り



巢はいつしかに毀たれたり……

おぼろに消ゆるふたりの夢、

古き古きわれらが戀物語。

## 生物

太陽は、

南の水のほとりより

森と野とにかがやきたり。

その野は燃えて、  
森は微風そよかぜにゆすられ夢む。

いろいろの生物ここに棲めり、



見よ、飛べるあり爬ふものあり、或る物は眠れるを。  
光の中に咽ぶを……

あゝ輝く自然よ！  
かれらの集りのここに來たる前  
蛇は早く、市の下水溝よりのがれ  
鳥はおそるべき煙突の巢を捨てたり。

遠き市より、村落より、  
かれらの跳りきたる日、  
新しき棲家は自由の中に生まれ、  
よき縁をもてかざられたり。

あゝ知れりや、  
彼等が記憶すべき日を。  
如何にその賑ひの歡ばしかりしかを！



## 日かげの停車場

わが古き停車場は、  
都會の中に埋もれし空洞に似たり。  
かがやく日の光、朝あしたに出て、  
煙れる市の輪廓を彩れども  
その光りは停車場の入口よりして引き返せり。  
わが古き停車場は、また赤き崖をめぐり、  
あゝいくたびか汽車は日に叫びをなす。

赤子あかこにむかひて笑ふ獸のごとく  
そはまづ煙をあげ、窺うかがみ足してすすみきたる。

晴天の日に女客おんなきやく、扉を出て  
裳裾もすそをかかげて階段をのぼりゆけば、  
またつめたく顛うふ階段を、  
彼の女おんなのうしろより、匍かひのぼる影あり、……

されど凄惨せいてんにして美しき女客。  
彼の女の消え去る前、  
停車場の時計は死して動かざりき。

あゝわが古き停車場は



黄金の碎片と毒煙の中に呻き  
たえず痙攣し、  
目は眇して『過去』をのみ凝視む。

わが古き日かげの停車場は、  
かくて今驛鈴を鳴らし初めたり。  
かくて今、何事か報ぜんとす。  
何事をか報ぜんとす。

## 午後の都會

午後。

狂ほしき情緒の中に  
人は半鐘を立てたり。  
あゝいま。

新しき火見櫓に、  
かきけぶる都會の背を眺め、  
何者か、黒き恐怖の叫びをなす。



青ざめたる叫びを。  
死せむとするものの叫びを。  
半鐘を立つる日………。

### 顔の憂鬱

汝があゆみこそ悲しけれ、  
眞珠色せる五月の雲のあひだより、  
斑らにかがやく日光の  
傷ましくも、半面を隠したれば  
そは彼の、うるはしき群集の中の、ひとり子のごとく。  
およそ又世界の忌むべき名によれる如く、  
愛はまたのろはる。



思を語れかし——かく汝が抱きたる  
險阻と黒の憂鬱とよ。

されど譬へば、蒼空の下。焔の水に沈み去り、  
熟せずして果物の落つるを眺め、  
心平かに、なほよそごとと見過さば  
汝はまた道知る者のたぐひにか眞の勇者かと、  
我はおそるる——

汝が顔の憂鬱こそは悲しけれ  
すべてすべて汝が歩みこそ悲しけれ。

### 我が憂愁

われは怡しき世を眠れり。

すべての歡喜と、かがやく愛とをあたへらるるも、  
わが悲しみの眼は開くことなし。

母胎を出づる時、

すでにわれは憂愁とともに生まれ  
われは憂愁とともに生きたり。  
「何故に人のかく悲しき」



われはかく誨へられたり、  
また、自らを疑ふことに狎れたり。

いかなれば君はそを空しと説き  
偽としても斥け得む。

不可思議なる運命は、  
我が身に根ざして蔓り、  
くるしみは靈を犯し  
日夜、謎の如くにつきまとふ暗き影あり。  
解きがたき沈黙あり。

われは我が指をもて、  
脊髓の節を知り、その音を聞き、

かくて自らの「生存」を知れり、  
されどそは眞の喜びなりや、  
されどされどそは何物をか證したりや。

ものうき、ものうき命の悲み——  
我が知るはただこの憂愁のみ  
あゝいづこを歩むとして  
堪へがたき寂寥と憂愁ならざる。

見たまひしか。君は彼の帆船のゆくへを  
青き帆船のゆくへを。  
風なければその旗はひるがへらず。  
死没の運命を荷ひてすべりゆく……



永き航海はかれらを疲らし、  
かれらの希望はたちまちに失はれむ。  
かれらの前に戦慄あり。  
かれらを呑まんとするの死あり。

朝に氣負ひて、われもまた。

彼方の岸を求めて漕ぎ。

かれらの如く疲れ、

たちまちにして戻りきたれり。

何物をも我は得ることなし、

あゝ大なる者は瞑想し、

固く閉ぢたる唇よりは、

いささかの言葉をも出さず、

われは貧しく哀れなる中に生きたり。

大いなる者よ、

あまりに靜かに、あまりに冷かなる支配者よ。

いかなれば解き得ぬ心にして、

いかなれば、我等は與へられたる！

懊める者にも、戀は緑の樹蔭をつくり、

しばしのほどの歡びをあたへんとす。

されば或るときはわれ、旅人の

泉に傷を洗ふごとく走り求めき。



あゝされどまた戀に何の力ありや  
氣の失せたる莓酒のごとく、  
そは悲しき味なるを。

われはかくして生けるのみ

われはかくして「生存」を知れるのみ。

われは怡しき夜を眠れり。

たとへ、すべての歡喜と、かがやく愛とを與へられるにも、

我が悲みの眼は開くことなし……………

### 沼河北賣のうた

いとし殿ごに。何で袖ないふりをする。

心にもないふりをする。

ほんにほんにと思へども。

青草のなよなよと。なよなよと。わしの心はまとまらぬ。

まとまらぬ妻の心は浦州鳥。群れ騒ぐほど。



騒ぐほど。

てもまあ初めて逢ふことが。

わしや何とせう。はづかしい。

わしが心は水の邊の。今は啼き立つ鳥である。

あとは寝鳥の静まれば。静まれば。

あれほんたうに待つたれど來ぬといふて戸の外に。

戀死などはせまいもの

ほんにねえ。

二

暮るるとて。暮るるとて。

あれ見やしやんせ。くるくると大山の端に落ちてゆく日わいな。  
ぬばたまの。ほんに床しい夜となり。

もしもさうまでわしが殿ご。お待ちやるならその時は。

そつと忍んで。戸を開けて。

わしや行かうもの。お前まで。

ほんに優しい殿わいな。わしが眞白のただむきに。

淡雪の。あはあはと若やぐ胸を、そ叩いて。

抱き寄りして股長に。

寝ねませうぞえ。何とまあ。よろしいこと。

待つたれど待つたれど。來ぬといふて戸の外に。

戀死などはせまいもの。

ほんにねえ。



青くさ

落窪の野の青草は  
風に吹かれて佗びしかり、  
風に吹かれて消えもせず、  
消えもせず、残るわが戀――



白き手の獵人



白き手の獵人初版



沈黙は最上の禮拜なり

薄伽梵歌第一章

自らの心の主人



## 雪の上の鐘

心の上に暮れ方の  
追憶おぼえの雪は静しずかにふりつもる。  
単調たんてうにしてあぢきなく  
柔らかに顫ふるへつつ。

埋うもるる愁しみは下に眠りたり。  
わが聲は閉ぢ、覆はれて、



燃ゆる墓標に胸をおく。

されども響く鐘の音の美しさ、

晴れし涙の涼やかさ、

静に。静に。うち揺らぐ。

わが心はうち夢む、

はてなくあゆみ行かんとぞ。

あゝ彼方なる谷間の風

ゆるく幽に我が胸をよびさます……

愁の銀の日没は、

わが身に深くほほえめり。

かよわき雪の青草よ、

あゝ青草よ。汝のごと慕ひいてん――

彼方に。彼方に。手も繊弱く。



## 雪の上の郷愁

いつもいつも、一物もなき雪の上  
平静にして聲を聴かず、  
神に肖しけものと、影の如き沈黙との  
ただ時折に往きかふ國——  
彼處をわれはさまよひたり。  
わが郷愁は日と夜と、  
夢の境の歌をきく。  
曙か。夕暮か。「時」は死せり。

青白く銀にかがやく雪のヒ  
ただ柔かなる重みあり、  
透明にして心を壓す。

われは地平線の彼方にて、  
過ぎゆく精霊を見送らん、  
銀灰色の衣著けて老いたる精霊を。  
あく。われはまた雪崩の谷間にて、  
そのとき、埋れし希望と戀、  
汚れざる柩と、百合とを見出さん。

彼の白き大理石の  
巔の墓によちのぼりなば、



われためらはず、かくとぞ碑銘を記すべし、  
「雪の上なる獨りの愛。」  
今ぞ求めし、祕密なる我が愛」と。

### 白き手の獵人

太陽は、かがやく絹につつまれ  
終のほほゑみは白く熱したり。  
そは我らの上、  
草木と戀との上に。

身は深き憂の中につつまれて  
すすり泣く風景の、  
光の陰をさまよひたり。



あゝ君が白き手の獵人よ、  
君が手は何か探りし。  
優しき胸のみだれたる草叢に、  
黄金なす草叢に。

君が手はかくも告げなん、  
『百合がつくりし埒の中  
寶石の胸やぶれて  
傷さし小鳥はそこに死したり』と。

かくて今、太陽は終りに呼吸す。  
われらが野よりの小逕に、  
日は美はしき靈魂の如くにまた。

### 死したる戀

われらが深く眠りしは、  
見えがたき日の何時なりし。  
心は目を閉ぢ、記憶は去れり。  
まことなりしか我が戀よ。  
鐘の音は燃ゆるに似たり——  
苦しき酔の涙もて、あゝ我が涙もて、  
鐘の音は鳴り響かん。  
見えがたき日の彼の聲は  
わが膚の上に鳴りひびかん……



すたれし聲

わが見る秋は傾きて、  
黄金のあゆみをつづけたり。  
音なく葉は落ち、葉は落ちて、  
君が心に眠り入る。

樺色なせる樹の間には、  
美しき眼のうかがへり。  
明らかに澄み、また夢み、

青絹の優しきむかしの追憶は、  
風に揺られてかがやきたり。

地平を過ぐる小鳥らは、  
今ははや海へ去らん。  
優しき死をば胸にだき、  
地平を過ぐる小鳥らは――

あゝ、君が周りに響く廢れし聲、  
われらが肉と膚との上、  
ものうく幽に顛ふ聲。  
來てささやけよ。『戀は終りぬ、  
樂しき旅は果てたり』と。



苦しき眠

日はわれより遠ざかりぬ。

鬱憂は額に残り、

吹き捲く風は衰へし

塵の中なる胸を揺する。

苦しき眠は來りたり。

戸を閉めよ。

空は苦痛に蒼ざめて

心の上にくだり來る。

熱病む鳥は、古き空家に羽ばたきせり。

すべての悲、追憶の夢をもて、

縛めらるる胸のうち

あゝ今早く、苦しき眠は襲ひくる。



祈願

鐘の音はゆるく鳴りひびけり。  
眺むる彼方には、

薔薇色の光漂ひたり。

木の間には夕暮ひそみ……哀しき色こそ浮かべたれ、

空は青ざめ磨かれて彼女の上に覆ひかかり、

かくも静けき祈願をば、

なほ鮮かに美しくなさんとす。

五月の夜は今か來ん……

小逕は草に隠れたり。

眠れる田舎のものすべて静まりて、

戀の心は柔かき涙の絹につつまれん。

哀しき心と樂しさに、

思へば百合のむすめ、むすめ——

彼女は泣きてまどろまん。

あゝ鐘の音はゆるく鳴りひびけり。

その聲は谷間に落ち、

その音は森に揺らぐ。

匂へる空に小鳥らは、

眠より避けて飛び、



優しき銀の陰影に消えんとす。  
夕は憩へり。夕は憩へり。  
樹木は煙りぬ。樹木は煙りぬ。  
重き涙と、ほほゑみと……  
あゝ戀は、  
繁みの中にかがやかん。



指

汝が髪の優しき中にわが指の  
わけ入りゆくはうらがなし  
いと柔らかにゆふぐれのあたりさまよふこちして、  
百合のなげきをきくごとく。

百合のなげきをきくごとく  
心はひとりなみだする。



寶石の逕。戀の逕。

とりあつめたる小曲の——  
指はさしぐみ涙する。

延びゆく夢

過ぎゆく鳥の影黒く  
憂の雨に羽ばたきす。  
池のほとりに灰色の溺るる聲、  
いと重く、また低く取り捲く聲、  
老いたる草は蔓りて、  
岸の彼方に靡きたり、



見知らぬ果に旅をする靈は、  
草の中にて死したらん。

月傾けば青白く  
おそるる眼もて打ちまもる。

いまわが池は、眠りながらに、

ものうく暑く肥りゆく――

憂の雨を味はひて、

あゝわが「生」は屍の上、

緑の花を着けんとす。

ひそかに、ひそかに延びてゆく

池のほとりの我が夢よ。

溺るる聲の

『さよ滅へ。さよ滅へ』とぞ泣く時。

青白き月の眺めに靈の果つる時。



## 古き月

あるは何<sup>な</sup>。地上に這へる煙こそ、言葉なく語りたれ。  
心の上を掠め去る物の影。

「夢なりし。夢なりし」とぞ影は眩く。

わが「過去」は

涙に脹<sup>は</sup>れていと重し。

繊弱<sup>かよわ</sup>き翼<sup>つばさ</sup>の、顔へつつ垂れ下る。

町のはづれに佇みて、  
醜<sup>みにく</sup>き灰色の夜は泣かんとす、  
荒れたる古き月いでて、  
あたりは暗く――

求むれば、

蒼白き優しさはさまよへり。

水をこえ、樹をこえて

靈<sup>たましひ</sup>は眠りつつ……



## 灰色の女

かがやく秋の光の中  
力なくして懐しき響あり。  
いと緩くほほえめる諧調は  
蒼白き手を解かんとす。

灰色の女はひとり憂へたり。  
そよかぜは枝の上、  
軽くいま、呼吸をなし

飛びゆく「昔」を見おくりたり。

静に絶ゆる色と響。

うち夢みたる樹木の死……  
やはらかに終の戀は目を閉ぢて  
乾ける空氣に身を溺らす。

あゝ君が髪を味はへば、  
またさらに、落つる實の香りは深く指に染む。  
膚をめぐりて顫ふを聴け、  
あゝ聴け……秋のほろぶる歌を。



焔と風と

君が胸に嘆けるもの、

われはそれを聴く、われはそれを聴く。

冷たき狭霧につつまれて、

戀しき生のひびけるを。惜めるを。

されど眺むる日没は

優しき絶望に手をのべたり。

樂しき死なる夕暮は、

輕き翼を搏たんとす……

あゝ君は猶、夏の誓を繰り返す。

手を組み合はせ、悲を防がんと、

あはれに顫ふ戀しさを繰り返す。

うづ潮なせる悲は、

今冬の日に来りたり。

空しくとざす狭霧の胸。

蒼ざめゆきし額には冷めて漂ふ焔と風……



白日の歌は死せり

柳のかげに堰せきかるる水の音  
その上によりかかり心は泣く。

胸浸したる街の壁

消え沈みする青白き憂の髪……

白日まじろの歌は死せり。

灰色かゝの重かさたき涙の衣きぬに似て、

はてもなき夢こそ覆ひかかりたれ。

眠よ。眠よ。

柳のかげに堰かるる水の音……

心は忘れ、

心はまたも傷む。

かかる時。かかる時。心は傷む。



愁 訴

やはらかに傾ぶける月かげよ  
われは憂を飲まんとす。

霧吹く風に漂へるみづらみと岸邊の森に夢みつつ、

月よ。汝が衰へし手の傍に

靈たましひの溺るるまで。終夜——

靈たましひの溺るるまで。

夜 の 雪

やはらかに雪をもて、

彼の女の戀は死せんとす。

ふりつもりたる胸の上、

やはらかに且つ蒼あざく。

うち皺みたる憂樽の

鋭き玻璃は顛へたり。

夜にひびき、消えんとし、



歩める街に雪はふる……

あゝ微風は遠くにつぶやけり。

月暗く市街の上に傾けば、

記憶は幽に雪降らす。

またも今……消えゆく窓と並木の上。

やはらかに、やはらかに、

彼女の戀は死せんとす。

雪をもて、雪をもて、

彼女は美しく……

## 記憶

街ゆけば、

夜の休息あり。

優しき者きたり、

影のごとく捉ふ。

記憶はすべてかかりしか。

並木は水に消ゆるまで。

幽なる笑の如く夢の如く……



惱める夕

惱める夕の色と光、

眠はきたらず、かがやきたり。

匂ひにまじれるひるの影は、

巷の上を去らんとす。

夕の額は傷きたり。

苦痛の花輪にかざられし

女の如きその額——

とどろきわたり日はくれて  
情熱の花をひらく。

軒にいだせし草花に燃ゆる雫はつたはれり。

あゝ熱したる巷の壁、

かげうちくらむ橋梁は

疲れて重き夢の脚

慾情の水に浮きあがる。

今宵、惱める色と光

血と——夢と、

その胸は縛めらるる女神のごと

苦しみに叫び出ん。



渦まく秋

うづまく秋の美しさ、

嵐はやがて襲ひこん。

汝が肉體の静けさに

やがてぞ嵐は吹き膨み傳はらん。

憂の夜の舟べりに

傾うき波はうちひびく。

暗く静にある宵は汝が幻の海ばたに、

ぬすむが如くのぼる月。

静なる肉體の、そのあたりもとほれば、

または精舎のけだかさ

香聴くごとく、廢れ果て

戀と死と、晝夜の、分かたぬ陰にうち顛ふ。



黄昏のゆめ

たそがれか。わが身は優しく死なんとす。  
溺るる色ともろともに、  
悩みに憊れ、うち夢み、  
溺るる色ともろともに。

並木は街に煙りたり。  
うち揺らぐみ寺の鐘、  
それもまた夢のうち。

うるはしく記憶の星はふりきたる。  
數かぎりなき夜の天に、  
香ひつつ、顛へつつ。

わが身は優しく死なんとす、  
無言に色の響く中、  
あゝ静なる手を添へよ！  
涼しき悩み切にして心はや溺るるを。



夜

あつまる夜の香はうれし  
忍び音に心はそこに泣き濡れん。  
手にもとりかね、目にも見ず、  
優しき影はあらはるる。

されども汝は青ざめぬ。  
胸固く、眉暗く、  
鋼のごとき汝が心――

哀れに善きはその言葉、  
息絶え絶えに語り次ぎ  
絶望の眼もてうちまもり。

戀しきは惱に深き額をあて  
凝れる汝が胸の血を聴くことぞ。  
凝れる血汐のとどろきを。

あつまる夜のうるはしさ、  
忍び音に心はそこに泣き濡れん。  
手にもとりかね、目にも見ず、  
優しき影はあらはるる。



## 窓

静なる白日の窓にそよふく風  
とどろく心を奪らんとす。  
惱みの味もいと深く  
うつらうつらの夢心地。

壁に懸けたる繪を見れば、  
血紅色の窓帷の  
窓にかがやき、やや暗く

幻のごと緑なり。

われなほ生の夏を愛するか。  
まことはかくも厭はしく  
かくもまた愛するか。  
河岸にちかき東京の病院の三階に、  
あゝ君よ。われは読みさせる集を閉ぢ、閉ぢつつも昏睡す。



苦惱の歌

暮れてかがやくわが胸に、  
夜の潮の寄する時。  
死のほめうたか、蒼ざめて「苦惱」がよばふもろごゑか、  
緑いろなるあてがれの  
船の帆ばしら音にひびく。  
のすたるぢあよ。満潮に、  
うねりも痛くおそろしく

悪しき願ひのもろつばさ  
影のごとくにはらみたる。  
あたりは金の朧ろめき、  
祕密の青のおぼろめき、  
惱みの天にさししめす  
雲の旗手の星じるし。  
飢えてかがやく靈の  
黒のなやみの星じるし。  
あやしき海よ。わが船は、  
燦爛として遅遅として  
ながめのなかにおしすすむ。



されば、悲しき形體も、  
さみしき戀の幽靈も、  
ほのほのごとくすすり泣き  
かの鳥かげになほたのむ  
恍惚をこそ慕ひたれ。

夜は群青のびろうどの  
波の上へのりあぐる。  
不言の嵐渦まける  
波のゆめぢへのりかける。

のすたるぢあよ。なほつよく  
わが胸の上にてゑあげよ、

悲しみに酔ふそのこゑを。  
のすたるぢあよ。いと強く  
暮れてかがやく夜の潮に。



死のねがひ

勻<sup>なま</sup>へる國の日没は

遠きはてよりよびさます、

衰へし身のくれがたの

金紗の夢に落つるこゑ。

のぞみ溺るる空あひに

祕密の光かがやけり、

焰<sup>ほのほ</sup>はいつか蒼ざめて

花の勻を焦がす時。

幽<sup>かすか</sup>に、幽<sup>くろ</sup>に薄暮<sup>たがた</sup>の

我が風景は泣きよばん

よろめく森の惱ましく

死の恍惚のきたるまへ。

心の内にいと惨<sup>むご</sup>さ、優しき力我は知る

夜中<sup>よなか</sup>となれど日は落ちず、

空は皺<sup>しわ</sup>だむ練絹に、

金と黒との死の願ひ、

燦めきながら、揺れながら。



權

消ゆるを惜しめ、うつつの權

わが身の上を漕ぎゆくを。

天たかく、されどしたしく

いつも妙に、いつも深く影のごとひびけるを。

消ゆるを惜しめ、入日空。

わが奥心ぞ目をさます。

悲の雲あかあかと顯らかに燃え、のびあがり、

にぎれる聲のいわけなく。

入日静にめぐらせば

靈染めし權も西。

影むらさきに、脚金に

そは幻か寶玉か、あらはれてしる聲の聲。

さけべる聲のいわけなく、

わが血の嬰兒目をさます。

消ゆるを惜しめ。なほ汲めよ。

權には映るわがいのち。

また吹き落とす良き心。



野は杳かなり。息絶えて  
紅き靄著る小舎の屋根。  
うつけて立てる樹の沈黙。  
耀く牡牛。

これらあだかも良き心。  
ひとつびとつに靄のかい、あらはれて去るその上を。

わが血の嬰兒よびさせ。  
消ゆるを惜しめ。

道途絶えたるかの空に、  
遠き精霊か、今すてに入目をあらふ權の聲。

## 現身

春はいま空のながめにあらはるる  
ありともしれぬうすぐもに  
なやみて死ぬる蛾のけはひ。

ねがひはありや日は遠し、花は幽にうち薫ず。  
ゆるき光に靈の  
煙のごとく泣くごとく。



わが身のうつながむれば  
紅玉かみぎくの靄かげたなびけり。  
隠かくろひわたり、染かみみわたり  
入日いりひの中に沈透しんとうく聲。

心もかすむ日ぐれどき、  
鳥はかなびつつ花は黄に、  
恍惚くわうくわうの中吹き過ぎて  
色と色とは弾はきあそぶ。

慕かはしや、春うつす  
永遠えいゑんのゆめ、影かげのこゑ。  
身みには揺ゆれどもいそがしく

入日いりひの花のとどまらず。

春はわが身にとどまらず。  
ありともしれぬうすぐもに  
なやみこがるる蛾かのけはひ。



さぎりのみね

さぎりのみねにたなびきて  
銀に音なき波はきこゆ。  
空をはるばるたのめなく  
はるばる空を月の旅。

いつも變はらぬ君がゑみ  
うれひの中にうちみれば  
青ざめがほの美しく――

月さすかたや、をりをりは  
幽かすかにくらき細雨ほそあめのふるとしもなく濡れども。

ゆくへさだめず、くもりせず  
おちばまぼろしちりかふ幻に  
ほほゑみ落つる月のこゑ。

さぎりのみねに、彼の空に  
青ざめがほのうつくしく。



梅 檀

せんだんの花のうすむらさき  
ほのかなる夕にほひ、

幽なる想おもの空に

あくがれの影をなびかす。

しめり香かや、染ぞみつつきけば  
やはらかに忍しのぶ音ねもあり。  
とほつ代よのゆめにさゆらぎ

木のすがた、絶えずなげかふ。

あくゆふべ、をぐらく深く、  
わがむねをながるるしらべ。  
せんだんの花にふるへて、  
わがむねをながるるしらべ。

世は闇にはやも満つれど  
たぐひなきあくがれごころ。  
消えて身は空そらになびくか。  
せんだんの、あはれなる花のころよ。



戀の囀り

光の消ゆるいやはてに

おもひはゆるくとびゆけり。

茜あかねのほひ軟やわらかく

つつめども、なほそよげども。

をちこちに啼く砂ひばり

音色ねいろをゆりてこゑ微か、

海うみべも、丘おかもなみだちて

らす緑ひく靄の中。

時はしめりもあたたかく、

茜あかねのしづく、草くさの榮はえ

ほほゑみかはす空間そらあひに

戀のさへづりなほのこる。

戀のさへづり、わがむねに

空あだに染みゆくゆめごち。

光は消えつ、やはらかに

おもひ飛びさる日暮時。



## 僧の娘

僧

さだかならぬ夜のさまわが目に視ゆ、  
霧ふかき幽界の空にあらはれ  
眠れるごとく往來する立木の相。  
夜は長し、さらに深し  
流れは聞こえ流れは絶ゆ。  
あゝ、古き年月のわが惱に  
融けて沈めるこの灰色

萬象は酔ひたるか、心霊にかよひ  
何ごとか恐ろしき寒さは来る。  
わが娘よ。こし方の悪しき懺に  
わが靈はのぞみ失ひ  
わが眼ははや暗くなりぬ。  
みちしるべせよ、  
いかにせし……  
我は慄く。

僧の娘

わが父よ。空は今やうやうに光を磨く。



僧

つかみし手には黒き荆棘、  
あやしきゆかりに今ぞ傷つく、  
あゝ血潮——何のころぞ  
そなたをのせて或日のくれ  
夢の彼方を過ぎりし時  
亡き妻の青き追憶は波にゆらめき  
聲あるごとく目にあふれ漂ひしが。

尙われは其時に我が娘よ、外なる一つの光に見  
入りたりき。  
それぞこの血潮の光。

したたれる闇の心霊……  
彼女の光は長く長くとどまりにき。  
海邊なる森の上に  
世にいそぐ歡會の船の帆さきに  
いそいと飛び交はす幽暗の戀の翼に  
彼女が香へる髪の内  
黒き夕の霧にむせび沈みゆく失意の巖陰に。  
あゝさなり、長き年月  
われはかの名残を嘗めき。  
今はあやし真なる妻を想へば  
故しらぬ底ひよりなみだはわく。  
夜は深し、されど感ず——  
われは我がかたはらに、



不思議なる心霊を感じず。  
あたりなほ暗きか、我が娘よ  
心霊は寒し、  
心霊は感ず――

僧の娘

我が父よ。空には雲のなごりもなし  
早春の夜氣は薔薇とひらき  
静かなる物ごしはゆきかへりつ。  
心を衝ち、胸に流れ  
にほひの夢は我を溺らす。  
聲なき歌のこの世界、  
消えゆく色に身をゆだねて

いつかたづぬる我が倂、  
あゝ、今ぞ月の出潮  
緑の夜露は父が杖にすがりゆらめく。

僧

そなたの聲はわれを誘ふ  
そなたはあやしき戀の精氣  
遠き記憶はおぼろげに  
そなたの奥にたち昇る。  
白く動ける月にもつれ  
木立に揺るは彼の日のすがたか。  
あゝ、それは眞の影か  
そこに立てるは亡き妻か！



亡き妻のすがた出づ

亡き妻

今こそは君にかへらむ、  
静かなるこの悦、  
わが身はふたたび君がものぞ。

僧

あゝ妻よ、君が頸を――

亡き妻

あゝ夫よ、君が心霊を。

僧の娘

いかにぞや。目に視るは知らぬ佛  
憂愁をばみかけるごとし  
その面は謎の光に  
漂泊のかけをのこす。

亡き妻

あゝ娘。わがのこせし光の一つ  
されどおもひてはそなたには避らず  
されど今そなたには我のみ生く  
静なる愛となり生命となり  
盛りなる靈の四時をひらく。



僧

其聲は遠くに搖る……

今ははやすがた見がたし

されどわが心こころ靈たまの面おもてには

いと強き接吻はつはの焰ほぞのこる。

あたりにただよふこの嗚咽なげき、次第ついでにうつりゆくこの悦よろこび——

わが娘よ、そなたの底そこよりくるこの悦よろこび。

二つの重み

深く見交はせる眼まなこのうちに

類たぐひなきこの悲しみ、

何ごとぞ、靈氣たまとなりて

秋の日の夕ゆふに涌わく。

君がため、あはれみ泣なくは

そのかみの憂うれひにあらず

追憶おぼえの長ながき夜更よけに



散りゆきし、のぞみにあらず。

言葉なく君とむかへば  
かぎりなき心あらはれ  
かがやける淵の面より  
示し來る二つの重み。

熱く燃え絢へるが如く  
その重み、銀の鱗の  
折折に光はなくて  
夢の間をすべるがごとし。

この深き流の秋に

今あるも我ら聲なし、  
何ごとぞ、魂を汲むとも  
遂にまた逢はぬ悲しみ。



早春

早春の空に、  
羅衣の淡い紫、  
冷たき光に透きつつ  
かがやく雪の静けさ。

雪崩は、高く空に  
曇らぬ胸をよこたへ  
燦めく晨の光、

紅寶石をちりばむ。

海をへだてて遠く  
この時酔へるは何ぞや、  
一灣の内、かけ眩ゆく  
山山の春の序曲に。

(駿河灣にて)



回顧

日はいづこにか立ち去るなり、  
静なる波に手涵して  
白日の磯に憩へば、  
戯むれつつ波とあそべば。

日は何處よりか響くなり、  
溺れさす風光、懶げに  
ゆるく、單調にゆるく、  
かくて日はいづこにか立ち去るなり。

懶き唄

緑の草は早く

我が心の上にも老いゆく。  
夏倦めばただ生ふるのみ  
風ふけば、ただ靡くのみ。

地に生ふる餘りに深し。  
みづからの茂れるも、  
涌き來たるよろこびも、



すべてみな息づけるも、  
地にありてあまりに多し。

いかにして自らは返すを得ん。  
つれなくも日がかがやけば  
夏は倦み、世界は倦み  
我れはまた懶き餘剰に苦しむ。

## 寂寞

悲に酔ひつつあゆめ、  
我が心右と左に  
一條の軌道を横に  
火のごとく綱ひつつあゆめ。

響してたふるる死をも  
瀕死なる思考も怯ぢず、  
ひややかに、鋪石道を、



煙りたる巷をあゆめ。

朦朧とかがやく中を、

青白き煙の熱に

涌き立てる踊の中を、

往き過ぎて酔ひつつ歩め。

かぎりなき壯麗を心攫み

寂寞に眼痛み、

酔ひつつ、渴きつつ、直ぐ立ちて

患ふ如く歩め。

## 絶息

息絶え果てよ、此韻律

我れを、一切を、大いなる力もて

繋ぎとめ、波だたしむる

此韻律。

苦惱はつねに新たなり、

深く響ける聲と共に

長く地上に反響して



果てをも知らず。

きはみなく波うつ胸に、

花と花、句と句、

燦めき、飛びかはし、星の如くに相錯はり  
奏て弾くその聲聲自らを失ひたり。

われ夢む、この苦惱、この韻律

息絶え果てて世界の上に

一つ一つに浮きあがり、

一切は繋がるるなく、

流れあひ萎れゆく壯麗を。

## 登音

幽暗の流れにそひて

ただ歩めよ。我が心

登音ぬすむ子供の如く。

求むるところに知ることのぞむなかれ、

表はれし一つ一つに頭を悩ますなかれ、

その書を捨てよ、尊き經典をも、

その元をも、その結果をも、爾知ることなかれ。



我れ唯歩めよ幽暗の流れにそひて  
梵音ぬすむ子供の如く、  
頭の上に長く垂るる炎を見  
我れまた炎に注がれ喜び勇めよ。  
祭らるる偶像を卑しむなかれ  
卑しみ、炎を見のがすなかれ、  
我れ唯子供の如く恐れよ、偶像ならぬ發散を。

### 道のほとり

道のほとりに黙想の樹は立ちぬ。  
色移れども日は西に、  
世界は今し、傾けども  
息絶え果てしもののごと  
紆ひりしすがた色赤し。

靈たま染みて色赤し、



道のほとりに張りつめて  
枝のさき、葉の尖も  
一瞬にしてとどまりし  
動かざる其眼のみ。

暮れゆく村は蒼みたり、  
野を横に、

太き線ひく雲の色

紫暗く、沈みつつ

斑となりし野は低く。

道の起伏高く、ゆるく  
突きすすみ入る雲の中

うねりに抱けば、一つとなり  
蒼ざめし樹の胸赤さ  
點點として立ち竝ぶ。



月と蜘蛛と

醉ふばかりなる今宵の舞手  
森の中なる繁みの枝に  
月の光に網を懸く、  
麗はしき蜘蛛のかがやき。

醉ふばかりなる今宵の舞手  
生と死との、  
幽なる光の中に、

消えも失すべきよろこびに。

醉ふばかりなる今宵の舞手  
幻に泛く饗宴、  
生と死との喜びに  
消えも失すべき唄を懸く。

賢き人は眼をあげて、  
君の手振を見まもらん。  
あかるき智恵のかがやきを  
沈黙のうたの中に観て。

されど無心の今宵の舞手



君はただ織る、光の絲、  
魂の陶醉者、あやしき仆舞の踊子  
神のすがたをそのままの  
君はただ織る、光の絲。

今宵あやしき月あかり、  
君はただ知る、一つの心——  
輝きて、網に波うつを。

## 月の韻律

月は空と地とを  
やはらかに綴つてゆく濕つた言葉。  
或る時霧の中にゆらめいて、  
精氣を示す不思議な韻律。

延びあがり、蹣跚く樹は  
雪の中に黙した聯  
僧服の黒のあやしい光を帯びて



跼んだその影は、長く地の上に。

谿谿は落ちゆく……

靈の幽な吐息にまぢりながら

折節灰色がかつたゆるい身振を、

彼方地平の上に波だたせる。

ひろがりゆく世界の

穩かに暗みがかつた紫……

そしてそこに何物か無限の中に明かるく

次第にあかるく、無数の光となつて動く。

### 或る日の海の祈

我が頭の上に波の響あり、

寂としてその聲あたりに満ち

心を壓しひろがりゆく。

目ざめし者はわれひとり

息つまる寂寥の中に呼吸して

はるかなる想のはてをうちながむ。

海はただ灰色なり。

世界のさびしさそこに横はれり。



波や霧や我が幻影や

これら一つとなり、相あつまり

流るる微光遠く消えゆけば、

その曖昧一切の境につらなりつつ。

この時、われは心に喚ばふ、

我れは失ひしすべてのものを――

あゝ。深き世界の寥しさよ。

何物もなき貞潔はそこより来る。

孤獨と正しき勇氣とはそこより来る。

又悲哀か、喜か、けぢめも分かぬ

幽なるあひだよりして、

これらの祈、心に湧くを覺ゆ。

我が望み、不幸なる思想に反響して

次第に、あかるく、

不言のうちに波うつは海にも似て。



## 憔悴

干潟ひびとなりし海の上に、  
落ちくる月の光のみ、いとけさやかに照らしうつ。  
あとなき潮に露はれて  
見ゆるはただに暗き溼。

沖邊を吹ける風の音か、  
あやしき色をまぢへつつ  
底ふかき悲の奥わたり来て、  
心に固く吹き纏ふ。

測り知られぬ惱なやみかな。その分きがたき幻は  
生けるがごとく吹き入りて  
魂の隅隅すみすみふくらませ、  
瘡かさをふるふやまうどの瘡撃かさうちる膚に觸はるごと。

濡れてはためき、打ちかへす  
帆布のごとくわが胸に、

苦痛の半かきたれつ、沖邊曇りし海の上。

干潟に、今ぞ月落つる。  
影暗みつつ、終なるその微笑さびを投げあたへ、  
月ながながと靈魂れいこんの憔悴しやうすいの手をさしのばす。



蔦

落ちたる塀に纏はる蔦は、  
悲しけれども力あふるる。

われまた延びよ。安らかに  
深き心の手をのべて。

煙や、霧や、山岳や

あゝ、いかにかのうるはしき。

延びよ。この養ひの中に  
自らの日の完きまで。



寺

長き光は空にゆけり、  
ものみな生きて、ゆらゆる<sup>ほのほ</sup>炎となり  
あはれ今、聲もなしや  
尊くぞ繞れる地は。

高き木木、その身は霞み  
無限なる調べを<sup>た</sup>炷く。  
波うてる地の香爐<sup>かうろ</sup>の上に

大いなる心を示し。

われ聽けり。のぼる祈禱<sup>きとう</sup>は  
祭壇<sup>さいだん</sup>にまつはりゆくを。  
否、かくて無言の中に  
みづからの寺を<sup>か</sup>醸すを。



## 祭

祭なり。

その聲は無限の裡にひろがりて  
ゆるやかに押しすすみ

猛然と見えぬ力に波をあぐ。

色と響と神秘の中

何もなくて融けあへば

あとよりは、またためらひて、つぎつぎに騰る聲。

狂喜して返る魂かと。

祭は、げにや、秘密の花を焼く。

燻ずる香り、吹きすぎて

神の星座を焦すべく。

山車だしにきらめく花たばは、

聖きよき驕奢おごりの供物なり。

僕しもべとなれど、身も足らはず

牛は、おづおづ曳きめぐる。

牛はおづおづ良き心。

やあれ、曳け曳け、涙ながらに



やあれ、狂氣して、曳き廻はせ。

煙をあげて地を吹きしく。

麝香の渦のかのけむり

星座をかけて地を吹きしく。

祭は世にも稀なる花を焼く。

爛爛として唱和の聲は

神秘を罩めて海へ往く。

荒き粗野なる子供心に。

八月十四、十五兩日は深川大祭なり。八十餘の神輿と數臺の山車出づ。擔ふ者一萬餘人、牡牛數匹、手古舞等を以て數ふ。今年大正二年の祭は就中豪華を極めたりき。

## 舟夫

深き眠は舟夫を襲ふ

ものうく、悲しく蕭やかに

瘴氣にうたれ、心歪み

ただ狂暴の夢のみひとり

嵐の中を廻りたり。

水岸ちかく櫂は動かず、

赤く奏づる胸の上



寂然と息を呑み、  
心は現今を貪りて  
且つ倦じ、その手を伸ぶ。  
この臍に深き眠の中、  
空氣は青くうづまける不透明に  
流るる星燦然と光を放ち、  
出づる甲斐なき舟夫と舟と  
空しき泡の來り囓むに委す。

## 燈火

燈火はかがやけり、  
青き雰圍氣の中心にありて  
ゆらめく夜を燃やせば  
壯麗なる眺、素絹の上に現はれくる。  
樹はその下に影のごとく  
泳げることく戦ぐごとく、  
たちまちに半ば消え、半ばあらはれ  
遠くゆるく低きに立つ。



かくてまた何物か次第に浮かび  
點となり線となり、踊るがごとくなり  
ひきはへて動く布とぞなる。  
布は顫動す、きらびやかに  
布は顫動す、波をうちて  
顯かに血の如き光を流す。  
かくて大いなる青ざめし面  
燈火のほとりにかがやく、  
神聖に、  
しかも燈火を蝕する如く  
次第にその全面内よりあかるく燃ゆ。

## 反影

反影に向けて高く  
ものすべて痙攣らる。  
胸より半ば形態失ひ  
恍として白く、長く、無邊に走す。  
灰白む家屋は厚く  
つつまれて黙然たり。  
地に低く低く置かれし



家畜らの背中の反射。

色はうつりものみな失踪す、

かくて色うつり四周青く

人形の造れる家屋

人形の家畜を生む。

世界は急ぐ不思議の反射

次第にあかるく蒼くなる反射、

色はうつり、たましひ靈のつくれる家屋

靈の家畜を生む。

## 反響

柔らかな蘆の中の子供

笑は空に消えて

そこにはすがたも見えぬ。

笑は空に

緑の中に響く、

はでもないゆるいひろがりの中に。



世界はこの時、反響しつゝ  
何か懶うい優しいしらべを  
童話の海に波だたせる。

柔らかな蘆の中の子供  
酔うた世界は反響しつゝ  
童話の海に波だたせる。

### 羽搏たき

蛾は静かな額をあつ  
灰色の銀の光に、  
ものうく優しいその羽ばたき。

黄昏の明かりは沈透き  
夢の間か、  
絶えゆく命のひまか、  
愁はしいその羽ばたき。



影は落ちて、  
濕りし深い靄にとけ去り、  
いつかまた我が魂も  
そこはかとあかるく響き渡る。

### 海の上に

やはらかな銀の鼠色、  
その中につつましい舟が動く。  
波にのり、わたしの心へのり  
帆桁の静かな上までゆれる。  
やはらかな風もない銀の鼠色、  
その上に月が染みこむ。  
黄いろい嬉しい碎片が、



そして涙が、わたしの心に落ちる。

銀の鼠にほめいて、

そしてまた迷ふてあつとりと

素直な鳥が月に、小さい影が散らばる。

幽な響が胸に。

銀の鼠いろが水平線に

いつか静かな滋味をもたせかける。

そして心を懶いゆめに、

ただ一つの境へとそろそろひつぱりこむ。

## 松

海藻のやうな松は

薄靄の中に染めだす。

そしてはるかな真珠の海が

薄青いその肩をのぼつてゆく。

影を築くものが

何か、わたしの側へ落ちる。

わたしは疲れつつ、そしてあゆむ――



古く消え去つた戀のあとを。

銀のやうな縞子の松が

ゆるい唄の勾配に落ちこむ

哀れふかいその身振は

衰へた胸を撫てる。

閉ざした霧のうちに船は

松の枝をかけて過ぎつてゆく。

聲もないその帆は

古いむかしの戀かとばかり。

## 伴 侶

今わが心にはあやしき自然の象ぞかよふ。

柔らかに闇のあなたよりくる息吹の如く、

また飛ぶことはやく、親鳥の

おのが懸けたる巢の上をのぞむが如く。

われ久しくも忘れぬたり。

我れをはぐくむ恵の中、

泉のそばに手をあげば、内よりささやく言葉優しく



我が面に觸れ魂に匂ひもふかく染みにしを。

されどわが貧しき心失はねば、

たとへ泉はわれに塞ぎ

蜘蛛手なす路に出てて我が心つかれたりとも

流るる泉いつまでかかくも返らてありなんや。

されば今、

我が眼には満つ、かの者ぞ、

わが見馴れたる一つ一つの同じき言葉

わが魂に喜びて挨拶す。

あゝ、彼の者ぞ、森の繁みをはなれ

暗き畠の戦ぎより立ちあがり……

親しみ深き彼等の踊、

そよそよと吹き、勇み立ち

たちまちまた幽暗の流れにそひて

いぶかしき河伯があそぶ笛の音も。

我れみな聴けり——夢の間に

酔ひたわけたる色、匂、心怪しく入りくるを。

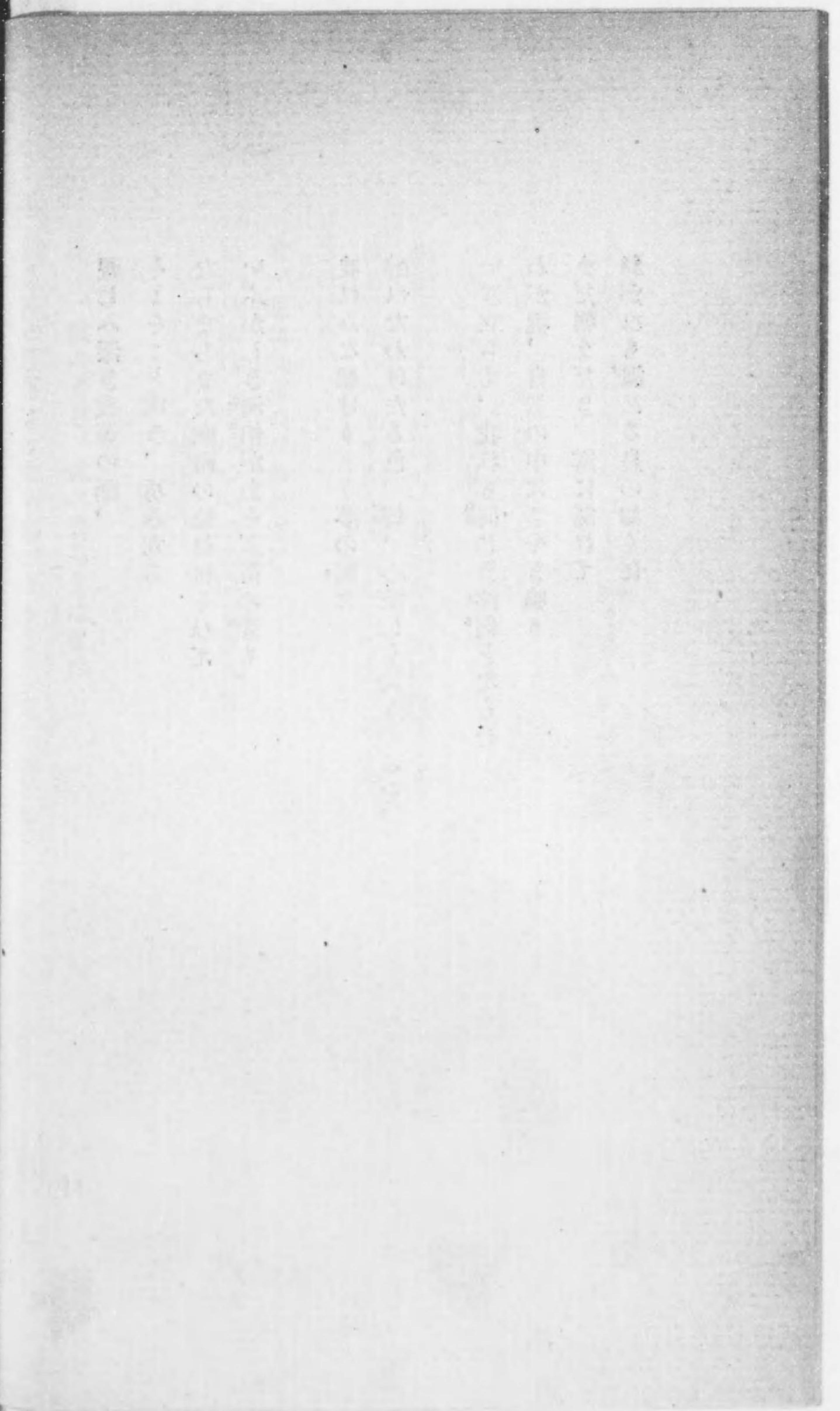
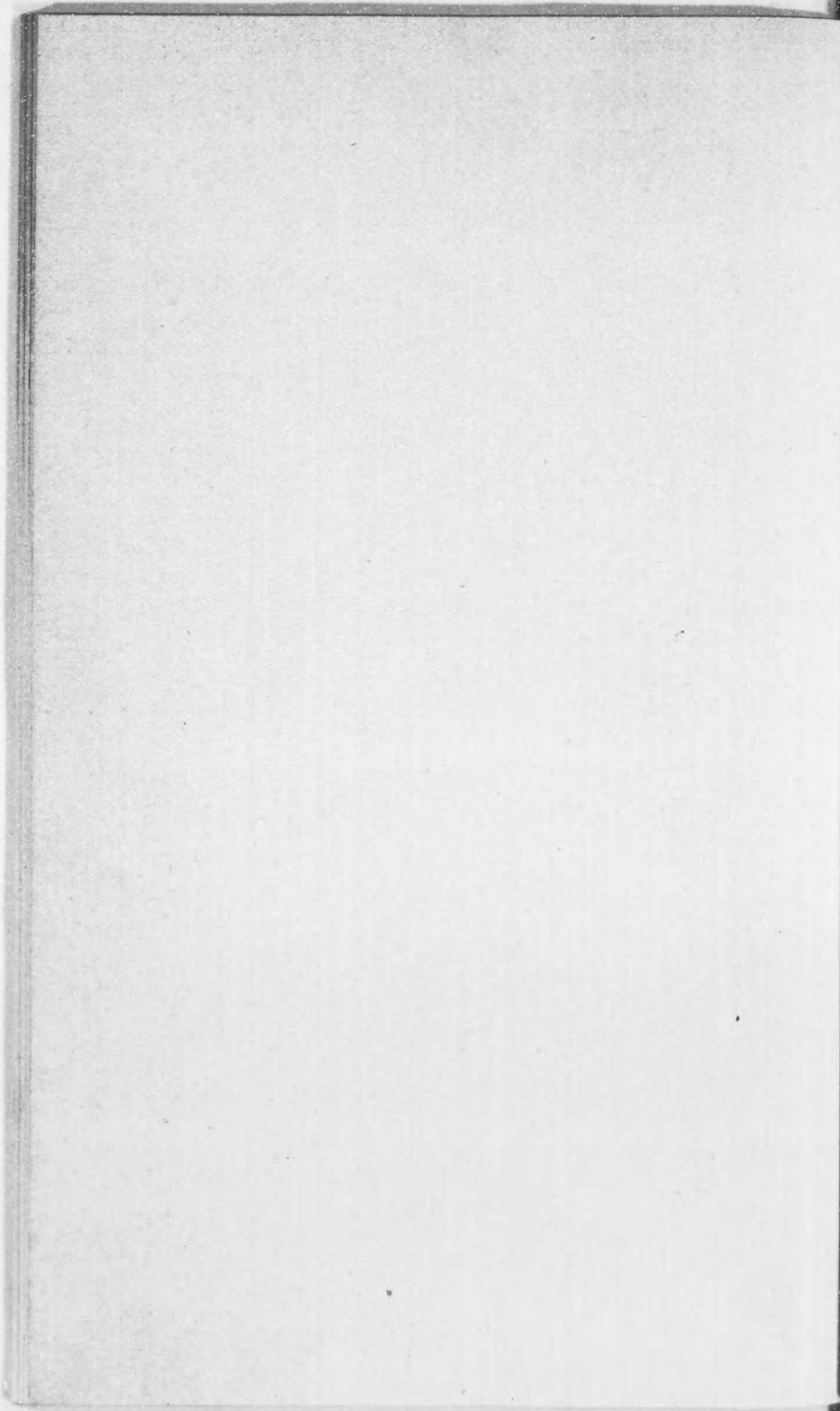
いざ立ちて、我れも同じき伴侶とならむ

わが魂、自然の中にさやぎ鳴り

まだ朝まだき、露に濡れて

羽がひも濕める鳥の如くに。







幻の田園



版初園田の幻



春

何の花か、村村に連らなり咲き  
香りは醸す、灰色空を、  
やゝ曇りし朱けの房に  
かがやく眞珠の光。

大いなる寺の屋根は  
その尖、春を焦がし  
なだらかに支へし隅は



あぶらの色を滴たらす。

緑はつづけり阜のはてに

見るからに霞む陽炎、

阜の土も燃えて

地に競ふものは天上の

すべての熱と光。

今、畝より畝へと涉り

うしろ手に、やをら麥ふむ人

かなたの路のべに

負はるる嬰兒笑ひ

一めんに映る、その聲、

### 柚は寝ねて

夜は深く槽火も消え

茅もてしつらへし柚の家に

あをあとと雪ふり、その音きけば

此世に生けるもの汝のみ。

かたき枕に臥しし柚は

棲みなれし山より外に見ず

善根の物語などものあはれに



今は寝ねて魂こけぬ。

ここの柚も、せいじやくも  
今こそぼたいのたねとなれ、  
思は盡きてただ獨り

取りつくろはぬ真夜中に。

けはひとなれる谷隈は

菴扉の外にそよめきぬ

我れはあり……されどなほ

雪はさやりつ爐の上に。

## 雪 後

静けさ、雪の上に、

日の光差しそふなり、

身のさびしさ、しのびしのび

空より吹く。

黄昏の、みぢかきあはひに

薄ひかる並木路

枝をひろげ粉雪染みて



響を揺する。

路、家、車のわだち

耀よふ灰色と結び合ひぬ。

水はめぐり越えて

風の真中に浮かぶこころ。

日の入雪の斑らに

あまたの影寄り添ひたり

うれしき喜びありて

一つに身顫ふ。

## 小童

草は延び赤らむ

野良にむかひて開ける門

聲なく静まりゐて

いま汗す——空と地との熟り、

日は斜めに、童子のこゑ

積み藁の光にうつる、

賑はふ響は傳ふ

遠き野の森かけを。



うららなるは何のかをり  
和らぎし地よりすか  
つつむ日が發てるか  
畠打の先きになづみて。

色赤き柳のもとに  
童子いまいしくうたへり  
草は延びあたり輝き  
深深と開きし門。

瞳

鎮めし暴風の中にかがやく瞳  
やはらかにうねる潮を映し、  
沙嚙む響も、波の上の戯れも  
ものうく寄せては傳ひゆくなり。

崩るる砂の刹那刹那は  
我か身を落とす黄金のしらべ、  
冴き恍るる血汐の中に



はるかなる岸邊ぞうかぶ。

緑の草、身を延して光を吸ひ、  
眠りし獣の澤もよく

あらがふことなく幻を貪れば  
その岸べ瞳の奥に深く憩ひぬ。

## 女性

晝の朧なる象かたちの中に

緑は暑くゆるく動き

聲なき深みに虎はすがたを現はすなり。

大いなる星の群は

さながら海より来て汝なれに近づく

月の輝もてるその蒼白。



ながるる雲をこえて  
柔らかき風は過ぎゆくなり  
女性の惱める世界の肩によりて。

流の縁に身を竦めて  
このとき、跳り上がるものは何ぞ  
そは汝か、汝以上の者か。

## 村 村

日の落つるところに  
村村は紫の微塵となり  
空に、聲なく、環を描きつつ立ち騰りぬ。

されど焼けのこりの村村は  
尙あかるき黄金の縁をもち  
榎めゆける血潮の澱を嘗む。



さて何者の老いたる手か  
このとき熱灰の中を掻き探す  
不断にはたらきつついそがしく。

## 沼の蘆

沼の上に流るるすがた  
蘆のあかるき繁みを分けて  
風はさまよひゆく。かなたへ。  
何ものもそこには空しきかなたへ。

流の音は限なくひびく  
眠の中に誘ひ牽き  
また交々にのぼりゆく、昇りゆく  
酔ひまどろめるひかりもて。



蘆は立ち、ならびうごかず  
暗きなかにかたく動かず  
をりをりに雲間をもるる  
風と、空の鏡との中に身を照らす。

正午

しらべはものうく弱く  
正午のかなたより吹きおくりぬ  
翼は音なく顫へ  
耀き透きとほりし言葉の

脆くもそこにとどまるのみ。

しなやかに千萬の響は



かくてその果てよりおこりきぬ、  
篩にかけし智慧ある銀砂子の  
織ぎ織ぎにあはせつつ。

正午は光の中にひろがれり  
麗はしき倦怠の空にふとり  
その眼はながき流の末の  
模様ある世界を夢む。

## 古瓶

緑の柱のそばに立ちてかの聲は曰ふ  
『閉ざされし小函を開けよ』と  
かの聲は爪だちて。

されどここには睡る  
造られし相すがたのままに  
乞食は隻手に其小函をささげつつ。



かたはらを鳥とびゆきぬ、  
ものうき、勢なき羽風を揺り  
またかたはらを、杖をもつ

鴛しき群はののしり過ぎぬ。

日の暮るるまで

かくて花は幾たびとなく落ちぬ。

されど階段の下、動かざる乞食は  
造られしすがたのままに  
脆づき、うなだれてあり。

縁の柱のそばに立ちて彼の聲は曰ふ  
「汝ははや其手に何物も持たず」と  
かの聲ぞなみだちて。



森

暮れゆく岡の上に  
あかるく、蒼くなる森の澤  
括りし柔らかなる頭を  
薄明りの空に攀ぢのぼらす。

光はそことなく草の上に  
鷺の夢を残す沼に  
夜の上に、あかるく燃ゆ。

童話の窓はかなたに開き  
そこよりぞ風は入る、  
黄菊と、野ばらとの  
その薫りを齎しつつ。

光は燃ゆ、  
光はあかるく燃えたつ、  
空にいづこともなく燃ぢれる聲、  
子供の笑ひごゑと共に白く。